

## 教材開発と教育実践Ⅱ

川 尻 伸 也

### Development of Teaching Materials and Practical Study Ⅱ

Shinya KAWASHIRI

はじめに

それぞれの学校で利用される教材は、指導要領に沿って開発や選定がなされるが、それが即、使えるという物でもない。1時間の学習を左右するものであることを考えると、慎重を期す必要がある。

少なくとも教室に持ち込む前に、いくつかの観点からのチェックが必要である。

そのひとつは、子どもの発達段階に沿っているか、もう一つは学習意欲を喚起し、持続させるものであるか、最後はそれにより一人ひとりが満足のいく学習の成果を得られるかということである。これらの観点から吟味され、開発された教材は、教育の現場で試みられて、その価値を判断しなければならない。

これまでにいくつかの教材を開発し、附属小学校や公立小学校、附属幼稚園や私立幼稚園で試みてもらった。その結果、いくつかの興味ある結果が表れたので教材開発と教育実践の立場から述べてみたい。

#### 1. 子どもの活動意欲をかき立てるもの

学校や公園で遊ぶ子どもたちを見ていると、夢中になっているときの子どもの遊びにはいくつかの要素が含まれており、それらが単独又は組合わさって子どもの遊びがあるように思う。

サッカーに代表されるボール遊びには、わかりやすいルールに基づいた「競争」の要素が含まれている。

ござやダンボールの敷物1枚が家庭の1室になり、ままごと遊びに熱中するときには、ごっこあそびの「模倣」の要素がある。

土いじりをしているうちにある形ができあがり、そのできばえに、喜んでいる子どもは「偶然」の要素を基に創作の喜びを味わうことができる。

偶然は子どもが意識していないが、子どもの中に潜むものを引き出したことになる。

さらに、ふだんの生活の中にはない遊びが「めまい」の要素である。タイヤ飛びの空中での浮き上がった感じ、ブランコの遠心力による放り投げられるような感じ、滑り台を降りるときの制御できないスピード感、鉄棒での逆上がり一瞬の回転のめまいや前飛び後ろ

飛びなどでのバランスなど、少し怖さを感じるけれども子どもの冒険心が、その誘惑を乗り越えるような遊びである。

これらの要素を持つ遊びが持続するためには、一つの循環する輪になっている方がよいと言われている。

サッカーは直線的に見えるが攻防は一つの輪になっている。また、対戦相手が次々変わっていく組み合わせも、輪になっているとみてよい。野球はベースを一巡する輪のゲームである。

ままごとは複数の家族が互いに訪問して、土だんごや花を散らしたご飯をごちそうになったり、一日の家族の様子を再現したりする。そのときの訪問は順繰りに行われているのが普通である。

めまいの要素を含む遊びのうちで、滑り台とブランコを比較してみると、滑り台の方でながく遊ぶ事が観察できる。これはブランコの順番を待つもどかしさ、遊びの単調さ、それに集団での遊びができていくこと、加えて輪になる遊びが構成できないことが原因だと考えられている。これに比べて、滑る、歩く（走る）、階段を上る、と循環の輪ができていて、多くの子どもがその輪の中に入って繰り返し遊ぶことができる。

ところが、上の4つの要素をもつものの中で、「偶然」は大人の世界では、パチンコ、競輪、競馬、競艇、麻雀等ギャンブル性のものが多いが、子どもの世界では、すごろく、トランプ、それに砂、粘土遊びなどと少ない。

この少ない偶然の要素は、子どもの潜在的な能力を引き出し、自分自身を見つめ直すのに不可欠の要素であるといえる。ここでは、この潜在的な能力を引き出すための素材（教材）や方法について実践事例を基に述べてみたい。

## 2. 子どもの自由になる柔軟さをもつ素材を使った教材開発と実践

### 1) 柔軟な素材がもつ偶然性

一人遊びで子どもが夢中になるものに、粘土遊びや土、砂遊びなどがある。

ここで彼らがなぜ夢中になるかを考えてみよう。粘土などの素材は子どもの手で思いのままになる物である。しかも、作り替えが自由にできる。このことが子どもの自己表現をかきたてるものと考えられる。

子どもが、積み木を手にはブーンといいながら高く低く動き回っているときは飛行機であるが、砂場に着陸して動くときは自動車であり、前面で砂を押しやる時はブルトーザに変わっている。このように子どもの発想は次々に変わっていくときがある。粘土遊びの時も目的はなく、いじくり回して遊んでいるうちに、ある物ができあがるという場合がある。その変化の過程は積み木の場合と似ていて、偶然の要素が多分に入っている。

柔軟な素材はこの期の子どもに偶然のおもしろさを味わわせ自分でも気付かない潜在能力を引き出すために不可欠の素材といえる。

子どもの自由になる柔軟さがある素材には、このほか粉、土、砂等があるが、粉は家庭でパンやクッキーを焼くとき人や動物の顔、花や果物等を作るのもこの発展と考えてよいだろう。土や砂は粘土遊びと同様の偶然性を持つが、限られたスペースの中の遊びは必然的に回りの友達と協力しなければならない状況を作り出す。トンネル作りや山、川、道路

など協力によってできあがるものである。

札幌の雪祭りや秋田県横手地方のかまくら等は、大人にとっては子ども時代の郷愁を誘うものであり、子どもにとっては自分だけの家を感じるのであろう。雪のない鹿児島では、砂の像が作られ年々、盛況になり観光客の誘致に成功しているようであるが、これも子どもの粘土遊びの延長上にある活動であると考えてよいだろう。

## 2) 古代から利用されてきた素材

縄文時代の昔から身近な粘土を使って煮炊きに必要な容器から、食料を保存する容器までそれぞれの場所で、作っていた事は遺跡の発掘などで証明されている。

土で成形した物を乾燥させ、火で焼くと水を入れても崩れず、固く壊れにくく落としたり故意に割れない限り、長期間使用できることを発見したのは、現在の電子レンジや電磁調理器以上の発見であったと考えられる。

このことによって、クヌギやマテバシイなど木の実や野草のあく抜きができ、食物としての利用の幅や調理法が広がり、以前より安定した食生活ができたことは否定できないだろう。水が浸透する不十分な素焼きの釜も、何回も使うことによって、煮汁などで目詰まりし、ゆう薬の役割をしたことも考えられることから、我々が考えるほど粗末な物ではなかったはずである。

同じ時代、黒曜石のやじりを求めて広範囲の交流があったとされているが、素焼きの技法も交流によって広まったと考えるのが正しいかどうかはわからない。

ただ、焚き火の下にあった土くれが、雨が降っても崩れない硬い岩石状になることは容易に見られる。自然の事象の変化を鋭く観察していかなければ生きていけなかった古代の人々であれば当然、気付くことが考えられる。こう推論すると自然発生的に各地域に素焼きの技法が生まれたと考えるのが妥当ではないだろうか。

## 3) 消えた素焼きの技法

魚介類の捕獲・採集で生計を立てるために湾や入江に発達した集落を基礎とする長崎県の市町村では、戦後まで漁業中心の集落には、沿岸の岩礁地帯の伊勢エビや瀬ざかなと呼ばれるものを専門にとる刺し網のおもりを作る人が存在した。

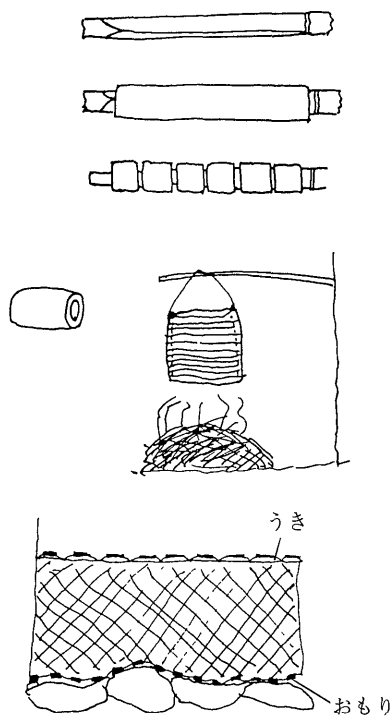
彼らは、その地域にある赤土と呼ばれる粘土を使って、小さい素焼きのおもりを大量に生産していた。おもりが海底の石の間に挟まったとき、強くひっぱると割れて網は無事に回収ができる、そのうえ安価であるため利用が進んだ。

このおもり作りは、筆者が見た素焼きの道具を各地域で生産する最後の職業であったが、低温から徐々に高温にしていく素焼きの技法が非常に合理的に行われていたので図示してみたい。

別の方法として、10ミリくらいの径の竹に他の女竹からはぎ取った皮を巻き、その上に赤土を付けて成形し棒を抜き取り乾燥させるやり方があった。

合理的と考えるのは、竹の皮は粘土が乾燥して内径が小さくなくても、それに応じて小さくなり、割れるのを防ぐことができる。

筆者は市販の丸棒に紙を巻き再現してみたが、成形はできても、棒から抜くことができなかった。そのまま乾燥させたら粘土が割れてしまった。



刺し網

よくこねた赤土を細い女竹の皮の部分に均等な厚さに巻き付け、ちくわの形にする。

皮を残し、同じ幅で輪切りにする。

端に丸みを付ける。

皮を付けたまま切り取り、乾燥させる。

米俵に藁と一緒にに入れて、上を荒縄で結び、丈夫な棒にくくりつける。

棒を石垣などに差し、下から藁や茅を燃やす。

米俵が燃えて中から、おもりが下の火の中に落ち始める。落ちてしまうまで藁や茅を燃やし続ける。

落ちてしまったら、上から木の枝をのせておきができるまで燃やす。

自然に火が消えるまで待ち、素焼きのおもりを取り出す。

竹は上と下の径がわずかに違い、しかも表面がなめらかで、抜き取りやすくできている。皮は竹から抜き取りやすく乾燥に応じて内側に巻き込むようにできている。自然の素材を巧みに利用していることがわかる。

焼き方は原始的だが素焼きを失敗なく行うための方法としては、理想的といえる。まず、乾燥させたものの水分をさらに抜くために、低温で熱しなければならない。それを下から藁を燃やし俵に火がついてさらに温度が上がリ、やがて下の火の中に落ちる。この方法だと素焼きに必要な低温から徐々に温度を上げていく方法が簡単にできることになる。

漁業中心の集落にはこれを専門に焼く者がいたが、陶器製のものが出回りさらに工場で鉛製のおもりが生産されるようになった。考古遺跡が現在の集落と重複していることを考えると古代から受け継いだものであったかもしれないが、原始技術の火は消えていった。

#### 4) 残る赤土の利用

日本の気候風土にあった家屋の条件として、畳、土壁、障子を利用することがあげられていた。これらは湿度を調節するために重要な働きをしてきたが、生活や家屋の洋風化及び規格化された安価な建築資材の普及等によって、少なくなりつつある。中でも土壁はほとんど使われなくなり、現在最も高い値段の壁材になっている。

その理由は、以前はどこにでも見られた赤土採取場が樹木に覆われたり開発されて露頭がなくなり、簡単に採取できなくなったこと、壁の下地の竹組みができる技術を持った職人がいなくなったこと、壁塗りしてから乾燥までに時間がかかりすぎて、工期を急ぐ現在

のやり方にそぐわはいことなどによる。

現在、赤土を多量に使うのを見ることができるところは、細かく分割された田や休耕田を利用しやすくする圃場整理で基礎地を赤土で固めているところぐらいである。

従来から一般に普及して現在でも利用できる方法は、赤土をセメントの代用として使う方法である。これは屋内でも利用できるが、風雨にさらされたり、水中に没する部分にも使える。そのため用水路や家の外壁としても利用されていた。

そのままの赤土は固まっても雨や水で流されてしまう。これを乾燥したらとけないように赤土に消石灰を混ぜ合わせた「あまかわ」と呼ばれるものがある。

セメントが粘土と石灰石を高温で加熱した物であることを考えると、これは生のセメントと言える。庭の泉水づくりや田の用水路づくりにはこの方法が広く用いられてきた。

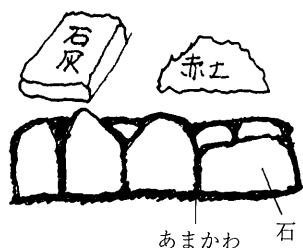
赤土を練り合わせる方法として、後述する内容と共通するので、ここで土の採集後の処理の仕方から図示して説明したい。



- ①市販の防水シートを1メートル四方に切り、四隅を2本の紐で結ぶ。細かく砕いた赤土と水を入れる。
- ②2人でそれぞれ紐を持ち、互いの左右の足で交互にもむようにして、こね合わせる。水は少しずつ入れていく。
- ③石灰を1、赤土3～4の割合でよく混ぜ合わせる。耳たぶの堅さを目安にする。
- ④石に付ける部分を水でしめらせて、あまかわをぬる。
- ⑤むしろやゴザなどを上にかけて、直射日光を当てないようにする。

(割れるのを防ぐ。)

- ⑥5～7日で直射日光を当て、2～3日乾かす。その後、水を半分ほど入れて、食酢を500cc入れ、水に触れていない部分にも溶かした水をかける。(表面の石灰分を溶かすため)



珊瑚礁でできた島では今でも海岸に打ち寄せられた珊瑚礁のかけらを集め火で焼いて石灰を作り水を混ぜて、石や珊瑚のブロックを固定するセメントとして利用しているが、石灰分が石と石を膠着させたり、固まると頑丈になることを利用することが共通していることは興味深い。

##### 5) 幼稚園や小学校での利用方法

表層の土を取り除くと、そのまま使える柔らかく粒の細かい赤土が見つかるときがあるが、乾燥して固くなったものは、掘りにとって乾燥させてから細かく砕き、ふるいにかけてから水を入れてこねるとよい。

ふるいは市販の土ふるいの細かい網目のものの上に、網戸用のサランの網を乗せてふるうと細かい粒のものが集まる。

こねた粘土で鉛筆より少し小さいくらいの棒を作って、指にぐるぐる巻いてみて、ひび割れたり、切れたりするようであれば、成形が難しい。このようなときは、楽焼き用の信楽粘土を混ぜるとよい。1:1でも1:2でも焼くと赤土の素朴な色はほとんど変わらなく出てくる。信楽粘土1キログラムは200円ぐらいであるから、信楽粘土を多く使う方が手間がかからないかもしれない。

他の方法として、採集した赤土を細かく砕くために、古いミキサーがあれば都合がよい。そのままよりも水を入れて細かくし、広いバットか衣装ケースに入れて水分を乾燥させる。耳たぶくらいのかたさになったらまとめてよくこねる。

粘土遊びは幼稚園児や小学校低学年の子どもにとっては、楽しい活動であることは先にも述べたが、それではなぜ、成形だけで終わっているのだろうか。焼成に至らはいのほなぜだろうか。

幼稚園や小学校低学年で焼き物が取り上げられない理由として考えられることは、

①乾燥に時間がかかる。

普通は乾燥に1週間~10日かかり、子どもの興味が失われやすい。

②素焼き本焼きと焼成に時間がかかる。

素焼きに1日、着色して本焼きするのに1日かかり、火力の整調にも神経を使う。

③焼き窯がない。(幼稚園)

小学校には灯油や電気の焼き窯があるが、幼稚園にはほとんどない。

④焼き方がわからない。

経験がないので、失敗して子どもの作品が割れてしまったときのことを考え躊躇してしまう。粘土を購入した教材店に素焼き、本焼きを依頼する。

⑤焼成は5年生でやるから。等である。

発達段階を考えて5年生に位置づけられているから、それを早く経験させる必要はない。

子どもは粘土を使っていろいろな動物や花などを作るだけで満足していて、自分たちの手で素焼きなどができるとは考えていないから、不満はないように見える。しかし、気に入ったものを作っても壊さなければならない。色を塗ることができない。等の不満はもっている。

現在では、土粘土を使って自然乾燥させ、保存できるようにしている。また、紙粘土で成形し、乾燥させて着色し、ニス塗る等の方法をとっている。

土粘土には、パルプを入れ成形しやすいようにしていて、もともと焼成用には作られていないが、乾燥させて素焼きをしたり、ゆう薬をつけて焼いたりしてみると陶土に比べ目減りがあるがそれほどの遜色はない。土鈴等ができる事を考えると自然乾燥のものよりも利用度が高い。色は黄土色、赤色(赤土色)等がある。

焼成する物は水または、どべで付けないと素焼きの時はずれやすい。また細い物は取り扱うときに折れやすい事、空気が入ると破裂しやすい事などを教えてから作らせるとよいだろう。

成形は、子どもの手でつまんだり丸めたり押さえたりしてできるものがよい。

例えば、ムツゴロウは、親指大に丸くのばしたものの背中と尾びれの部分を親指と人差し指でつまみ上げ、胸びれは等量の粘土をつまんで水を付けて押しつける。目玉は丸めたものを付けて、つまようじで穴をあける。背びれや尾びれにつまようじで筋をつけるとできあがる。冬季は成形した物を家庭用のストーブの上に乗せると10分ほどで乾燥させるこ

とができる。

### 3. 教師の技能習得と子どもの生涯教育の立場から

#### 1) 教師の技能と学習内容

現在小学校5年、6年で焼成の学習は行われるようになっている。粘土からの成形と素焼き後の着色は学校で行うが、素焼きと本焼きのいわゆる焼成は粘土を購入した教材店に依頼するが多い。これは教師の多忙を理由に挙げる場合があるが、焼き方がよくわからないという場合も多い。事実、小学校課程の学生は選修生を除けばこのことを学習する機会はないからである。また多人数を相手に到底実技指導はできない相談でもある。

かつては、図工主任を講師にして、学校単位で実技講習をして技能の習得を図ってきたが、現在はこのような方法をとっているところは少なくなり、特殊な技能になりつつある。

焼成を外注した場合、子どもは素焼き、本焼きの際の真っ赤に焼けた作品やそれを取り出すときの興奮も知らない。そればかりか、祖先が発見した火と土のすばらしい文化を体験しないまま終わってしまうことになる。身近に選択できる土と優れた熱源とがありながら、追体験することはおそくないであろう。

以下に述べる簡単な方法で、子どもとともに試みることによって、焼成に関する基礎的な事柄を習得できる。その上で高学年の指導をすることは容易であろう。また子どもにとっては、楽しい学習を経験するとともに、その気になればいつでも取り組める生涯学習の基礎を学んだことになる。

#### 2) 実践の試み

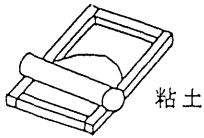
教材開発したものは、実際に試みられてその成果を見なければ、多くの学校に採用されることはない。粘土の成形、焼成に至る一連の活動は、附属小学校の生活科で取り上げられ、短時間に取り組めるということから低学年でも興味を持続しながら活動できることが実証された。これは低学年だけにとどまらず、全学年に波及している。また、子どもから大人へと広がっているとのことである。

公立学校では飽浦小学校でも試みられている。幼稚園では附属幼稚園での実技講習を終え、私立富士幼稚園は天候に左右される野焼きから、手軽にできるオイル缶による素焼きの方法へと切り替えている。私立の幼稚園が園児獲得のために、自分の園の目玉になる活動を公開しないのに比べ、国公立の幼稚園や学校は効果があると思われる教材は公開しなければならない。それを利用するかしないかは教師の意志に任せる以外にないが、互いの学校教材や授業を公開し合うことが、教育実践を深めることにつながるものと思うからである。

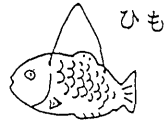
### 4. 成形から素焼き, 本焼きの方法へ

#### (1) 成形のいろいろ

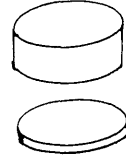
丸い棒で木枠の上を転がし  
さ1 cm程度に延ばす



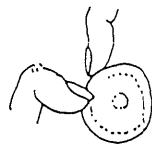
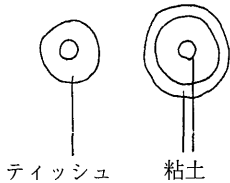
粘土ペラで形を切り取りペ  
ンのキャップやつまようじ  
でうろこをかく



お茶の缶蓋を押し厚つけて丸  
い型を切り取り皿を作ること  
ができる



カエルの土鈴  
粘土玉



口の部分をあげる



前後の足をひねり  
出す



目玉を作り  
水を付け取り付ける

紐を通す穴



目玉, 鼻の穴をあける

ふぐの土鈴

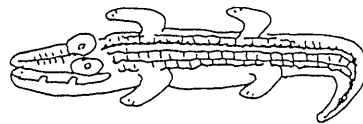


ムツゴロウの箸置き



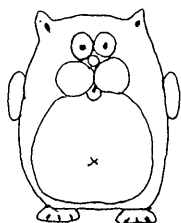
背びれ尾びれをひねりだし  
すじを入れる。玉を取り  
付ける

ワニの箸置き



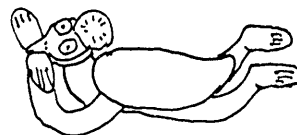
口の部分からつくり胴, 手をひねり出す。  
つまようじで背中の凹凸やす目じりを入れる

タヌキの土鈴



丸い玉を付けて顔を作り,  
腹の線をかきこむ  
腹はティッシュと粘土玉

カッパの箸置き

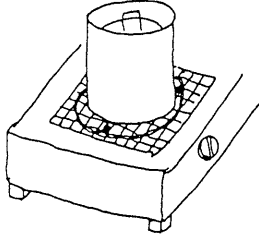


体に腕, 片足を付ける。  
頭の皿と甲羅を付ける。



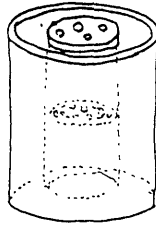
(2) 素焼用の焼き窯

家庭用のガスコンロで焼く



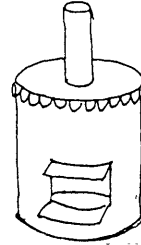
給食用の缶詰缶の底を切り取り  
その中に作品を積み重ねる。  
最低の弱火で10分ほど加熱  
中火で5分強火で10分加熱  
作品の大きさ、数で加熱時間調整

練炭で焼く



練炭を半分に切る。  
着火後上の空白部分に入れ  
る。火力は初め空気孔  
を締め弱火で、その後徐々  
にあける。

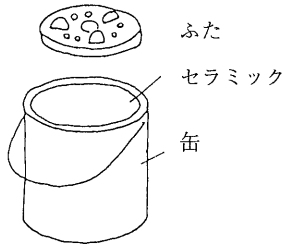
オイル缶で作って焼く



ジグソーか金切りはさみ  
で切り開け途中で金網を  
置き、作品を乗せる。初  
め新聞紙等を燃やし後で  
小さい木、大きい木と火  
力を増す。

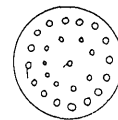
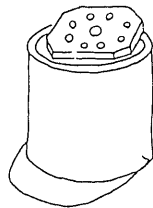
(3) 素焼きと本焼きのできる窯

セラミック練炭コンロの内筒



セラミックを割らないように  
蓋の金属を切り取る。

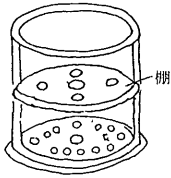
缶底を缶切りで切り取る。  
底のセラミックはそのまま  
使う。



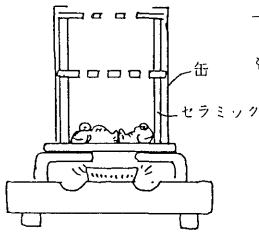
ごとくに乗せる底の部分を粘土で  
作る。5mm位の厚さに延ばして半  
径8.5~9cmの円を切り取り、コ  
ンロの火が入るところに小円を開  
ける。

(丸筒で)

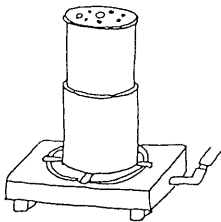
## 組み合わせたもの



作品を底に並べてから棚（底のセラミック）を乗せる。素焼きは重ねて焼くことができる。たくさん入れると火の回りが悪く時間がかかるのでいっぱい入れるより分けて入れた方がよい。素焼きは棚の中が真っ赤になっていれば火を消してよい。



下のセラミックの輪を置き、作品を底に並べてから棚を置きその上にもう一つのセラミックの輪を乗せる。



上の装置の中に業務用の缶詰缶（給食用）を乗せると煙突の役目をして、ガスの炎を窯の中に引き込み温度の上昇が早い。台所で焼くときは換気扇を使うこと、手をかざして温度に注意すること。（普通の家庭では換気扇を使うと問題なく焼ける。）

## 焼き方についての注意事項

1. 手始めに粘土は信楽（シガラキ）粘土のような楽焼きに適した物を購入した方がよい。慣れてきたら赤土を混ぜて素朴な色を楽しむことができる。
2. 釉薬（ユウヤク＝うわぐすり）は低温用の物を購入する。800～900度程度
3. 素焼きは十分に乾燥させてから焼く、自然乾燥では1週間～10日を目安に。ストーブの上に置いて乾燥させると乾燥時間を短縮できる。
4. 素焼きは最低の弱火で5分、強火で5分焼けば十分である。
5. 本焼きは絵の具（絵付け用）と釉薬を混ぜて塗ると手間が省ける。
6. 本焼きは作品が付かないように離して置き、5～10分で仕上がる。
7. ガスを切ってから作品を取り出し、水に入れても割れることはない。急いで見たいときは、火箸で挟んで取り出し水で冷やしてもよい。

資料

2年 生活科

長崎大学教育学部附属小学校

Ⅳ. 指導計画

- 土でつくろう…………… 8時間
  - ・ やきものを作る計画を立てる…………… 1時間
  - ・ 土を混ぜる…………… 1時間
  - ・ 成形する…………… 2時間
  - ・ 素焼きをする…………… 2時間
  - ・ 本焼きをする…………… 2時間 (本時 1 / 2時)

Ⅴ. 本時の学習指導

(1) ねらい

友達と協力し合い、道具や材料をうまく使って、色をつけたり本焼きをしたりすると共に、後始末をきちんと行ったりすることができる。

(2) 展 開

過 程	授 業 の し く み		時 間 分	
	子どものとりくみ	教 材 と 教 師 の 援 助		
計 画 す る / 実 践 す る	1. 本時の活動内容を確認する。	教材 ・ 素焼きの作品 ・ 出来上がりの見本 ・ クイズ (フラッシュカード)	○ 素焼きをした感想を述べさせながら、本時は、色をつけるということをとらえさせる。 しかし、多くの子どもは、材料がどんなものであるか、どのような方法であるのか知らないで、クイズ形式で紹介しながら意欲を高める。	5
	2. 素焼きをしたものに色付けをし、釉薬を塗る。	教材 ・ 絵の具 ・ 釉薬 ・ 筆	○ 自分の塗りたい色を選んで専用の筆を使って、素焼きの作品に塗らせる。なお、本焼きをする際の量が限られているので、本時では一人1～2個に止めさせる。 教師は、子どもの活動の様子を見ながら、適宜、次のような視点から、塗り方のコツを具体的にとらえさせる。 ・ 薄い色を先 (最後は釉薬)。 ・ 一つの筆をいろいろな色と混ぜない。 ・ 作品の底には塗らない。 また、ていねいに塗っている子ども、素早く塗っている子どもなど、子どものよさを認めたり、塗ることがうまくできない子どもを見つけ、励まししながら一緒に色を塗ったりして自信をもたせる。	15

実践する	3. 本焼きをする。	材料 ・コンロ ・セラミック練炭炉 ・素焼き皿 ・金はさみ ・水いれ ・画板	○ 4人一組のグループで安全に、協力しながら、本焼きをさせる。 なお、素焼きの時と比べて、共通すること（火傷をする可能性があるので、素手で焼けた作品や鉄棒等をさわらない・はさむ道具をつかって、水につける等）や異なること（一度にたくさんのものを焼くことができない・やきものの底には釉薬を塗らない等）くつつかないようにして置かせる。 焼いている間の時間の使い方については、色塗りなどに目を向けてくることが考えられるので、できるだけ子どもの発想を、取り上げて認めたい。 中のものが真っ赤になったならば、火を消して、しばらくそのまましてから、水につけさせる。	20
	4. できたものを見ながら感想を出し合う。		○ 出来上がった自分の作品に対する喜びを語らせ、成就感を味わわせる。また、友達と協力すると作業が素早く、楽しくできることに気付いた子どもの考えを取り上げて、賞賛する。 途中で作品の一部が欠けたり、紛失した子どもや、うまくいかなかった子どもにも、難しい活動に取り組んでいるということを話し、子どもなりの頑張りを認めたり、接着剤を、使用させたりしたい。	5
	5. 後始末をする。		○ 教師も、率先して、片付けを行う。この際、後始末が遅れがちな子どもと一緒に活動し、できるだけ、その子を誉めることにより、協力したり、きれいにしたりすることのよさに気付かせる。 使用した用具は、元の場所にきちんと戻させる。	

## (3) 評価

友達と協力し、道具や材料をうまく使って、色をつけたり本焼きをしたりすると共に、後始末をきちんと行ったりすることができたかを、活動している子どもの姿やつぶやきによってみる。

## おわりに

幼稚園や小学校の子どもたちでも興味を持続しながら取り組める焼き物の方法を開発したが、それが子どもに受け入れられるかどうかは、実際の場で試みられなければわからない。その機会は平成6年1月20～21日の九州地区生活科研究会（長崎大学教育学部当番校）で附属小学校の阿部和隆教諭に授業で実践していただき、生活科の単元として位置づけられることを実証できた。その後の様子では、1年生へのプレゼントとして新たに焼き、箱に入れて贈ることになっているとのことである。また、全学年の子どもや先生に波及しているとも聞いている。

ともあれ、焼き物作りは長時間かかり、特別な焼き窯がないとできないと考えていたことが、短時間にしかも簡単な装置でできることがわかったことと、子どもの興味が結びついたことがこのような結果になったと考える。

教師にやる意志があれば、どの地域でも取り組める内容であり、本格的な焼成の知識や技能を身につけるには、いささか荒いものであろうが、自分の学校の焼き窯を使って焼く意欲と技能は身に付くと思うのである。

## 参考文献

- 新日本郷土史大系 長崎県の歴史 文画堂 箭内 健次著  
日本の古代遺跡 42 長崎 保育社 森 浩一企画 正林 護著  
有川町郷土史  
上五島町郷土史  
新魚目町郷土史  
外海町郷土史  
附属小学校 生活科年間指導計画